



武家文化財調査修復事業について

研究報告
【博物館学】

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員
伊達元成

平成22年度から、伊達市開拓記念館（以下、記念館）に所蔵されている武家文化財の調査と修復を目的に、武家文化財調査修復事業が行われました。どんな内容の事業であるのか、そして何が明らかになったのかを紹介します。

■オリジナル情報

博物館の史料は、制作年代、制作場所、購入先、価格、材質、用途といった情報をしっかりと調べます。ここではこの情報を「オリジナル情報」とします。

オリジナル情報は展示する際の基礎データとして、民俗学や歴史学、美術史など様々な学問の研究素材として利用される重要なものです。つまり博物館史料というのは、実物のモノ史料と情報によって構成されており、その両方を管理します。

しかし伊達市に寄贈された多くの武家文化史料は、「伊達家伝来の家宝」という状態で寄贈されたので、オリジナル情報が全くありませんでした。おそらく、当時初めて手にしたときはオリジナル情報がしっかりと残っていたはずです。しかし、長い間人から人へと受け継がれる間に、次第にオリジナル情報は消失し、「これは大切なものの」という意識のみが残り、現代まで伝えられてしまいました。試しに開拓記念館に行ってみてください。展示史料のキャプションにはオリジナル情報が乏しいため、制作年代や使用者、用途がほとんど書かれていません。

そもそも、日常の生活に根付いたモノであるほどオリジナル情報が消失していく傾向にあります。たとえば、お家にある食器の来歴をすべて把握していますか？

「ああ、そういうればこれは甥っ子の結婚式で相手の両親からプレゼントされたグラスだわ」 という情報も、次の世代にはまず伝わらず、グラスだけが伝わっていくと思います。これが十何代も続くわけですから、すっかりオリジナル情報が消失してしまった過程を容易に想像していただけると思います。

また、江戸時代では大名同士、藩同士では頻繁に調度品の贈与がなされていました。これは力関係を示したり、政治的なバランスを取るために行われていました。

この贈与の度にもオリジナル情報は消失したり、あるいは意図的に伏せられていったと思われます。ところが博物館ではモノと同時にこのオリジナル情報がとても重要になってきます。モノと史料を扱う学芸員にとって必要ですし、見学に来た来館者のみなさんにとって、必要な情報です。

しかしあくまでも完全に消失したオリジナル情報を読み解くのは困難な作業です。そのため、ひとつひとつの史料をよく観察し、特徴や素材を把握して、制作年代や用途を探る作業が必要です。

■プロジェクト始動「お宝から史料へ」

開拓記念館が多くの方に利用していただける魅力ある館になるように、また研究者にとって使いやすい環境に整えるためには、これまで「宝物」として扱われていたモノを「史料」として扱えるように位置付ける必要があります。そこで平成22年度から「武家文化財調査修復事業」がスタートしました。

事業の大きな柱は、①展示・保存・管理ができるように修復を行い、②史料の名称・用途を明らかにして、③歴史学的・文献史学的に来歴を明らかにする、としました。

今回の事業では開拓記念館のすべての史料を対象にすることはできませんでしたが、今後の保存・調査・修復の基本的な方針となることは間違いないことと存じます。



写真1 修復中の福山先生。ミリ単位の修復が続く

まず、調査と修復の対象とした史料は、伊達成実公旗指物、伊達政宗公書状、伊達成実公書状、洛中洛外図屏風、亘理伊達家雛人形、貞操院御遺物と呼ばれる調度品約160点、古文書史料4点です。

■修復・調査の詳細

1. 伊達成実公旗指物

旗指物は、整理作業中に偶然発見された史料で、形状からみて亘理伊達家二代当主である伊達成実公（1568～1646）のものと見られています。寄贈後も公開されることなく、長年収蔵タンスの中で眠っていたため、ネズミの糞や虫食い、カビが発生している状態でした。

虫食いなどの欠損があると、周りの生地に負担がかかって

しまい、そのまま展示してしまうと亀裂が拡大するおそれがあり、安定的に展示することが困難です。旗指物の修復は、これまで開拓記念館所蔵の染織品の修復をしていただいている北星短期大学名誉教授の福山和子先生にお願いしました。

修復はまず旗の裏から柔らかいメッシュの生地をあてがい、これを支持布としました。これは展示したときに旗本体に負担がかからない様にするためのものです。そしてこの支持布に、ヒラヒラと動いてしまう虫食いの切れ端を縫いつけることで、虫食いが目立たなくなり展示した際にも見た目を損なわないようにしました。修復の作業は、よれや弛みがないようにつづつ細かな手作業で縫いつけました。この修復は春には完了する予定です。（写真1）

2. 伊達政宗公、伊達成実公書状

これら二つの書状は、仙台本藩と亘理伊達家の関係を示すとてもよい史料です。

元々は、手のひらサイズに折りたたまれた形で送られた手紙ですが、ある時、軸に仕立てたものです。こちらも経年劣化のため、紙の一部が破れたり、虫食いがありました。本当は手紙の差出人や、内容が重要なのですが、掛け軸としたときにはそれなりの風合いが必要です。そのため、貴賓高く高貴な印象になるよう、手紙以外の装具はすべて新しく作り替えました。（写真2）



写真2 修理前(左)と修理後(右)の伊達政宗公書状のカラー写真

3. 洛中洛外図屏風

今回の修復で最も大型の史料である洛中洛外図屏風は、洛（京都）の様子を描いたもので、当時の活気ある人々の様子が描かれています。

この屏風は記念館で展示されていました。昭和60年代に大規模な「昭和の修復」がなされました。しかし、修復が不十分だったので今回修復しました。

昭和の修復では、一番重要な絵そのものに鉛筆の線が記入されてしまい、それを隠すように上から化粧紙が貼られていることが判明しました。そのため、この屏風は実際の大きさよりもやや小さくなっています。さらに一度解体した屏風を組み立てる際に、絵がずれて接着されており、人物の腰から下が一致していないなど鑑賞上問題もありました。

また絵がずれて貼り付けられてしまっていたので、折りたたんだ時に画面が接触してこすれてしまい、どんどん絵が剥落する状態になっていました。これでは通常の展示のみならず、保管していても破壊が進んでしまいます。つまり「昭和の修復」は破壊を促進してしまったのです。

今回の修復では記念館の史料として、保存管理ができる、年数回の展示に耐えられるようにするために、十分な下調べを行ってから修復をすすめることにしました。

まず、この屏風が作られた年代や作風を調べることから取りかかりました。調査にご協力いただいたのは、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の小島道裕教授